

日蓮大聖人御書全集

みようほうびくにごぜんごへんじ
妙法比丘尼御前御返事

新版
2121
ゝ
2123

みようほうびくにごぜんごへんじ
妙法比丘尼御前御返事

こうあん ねん
弘安4年（'81）
さい
60歳
みようほうあま
妙法尼

めいいひと
明衣一つ、給び畢わんぬ。

によにん おんみ なん 後
女人の御身、男にもおくれ、親類をもはなれ、一、二人あ

娘
るむすめも、はかばかしからず便りなき上、法門の故に人に

怨
もあだまれさせ給う女人、さながら不輕菩薩のごとし。

ほとけ おんいも まかはじやはだいびくに によにん
仏の御姨母・摩訶波闍波提比丘尼は、女人ぞかし。しか

あらかん たま
るに、阿羅漢とならせ給いて、声聞の御名を得させ給い、

ようふじようぶつ どう い たま
永不成仏の道に入らせ給いしかば、女人の姿をかえ、

后くらゐすほとけおんうやま勸しじゅうよねん

きさきの位を捨てて、仏の御すすめを敬い、四十余年が

ごひやくかいたもひるどうろ侍ゆるじゅげぎ

ほど、五百戒を持つて昼は道路にたたずみ、夜は樹下に坐し

ごしよう願じようぶつどうゆるようふじようぶつ

て後生をねがいしに、成仏の道を許されずして永不成仏の

憂なながたま口惜

うきなを流させ給いし、くちおしかりしことぞかし。

によにんかこおんのんごうあいだあな

女人なれば、過去遠々劫の間、有るにつけても無きにつ

徒名た恥くちお

けても、あだなを立てし、はずかしく口惜しかりしぞかし。

み厭かたち寡あまなそうら

その身をいといて形をやつし、尼と成つて候えば、かか

歎はなおもそういにじよう

るなげきは離れぬところ思いしに、相違して二乗となり、永

ふじようぶつき浅

不成仏と聞きしは、いかばかりあさましくおわせしに、

ほけきよう

さんぜ

しよぶつ

ごかんき

ゆる

いつさいしゆじよう

法華經にして三世の諸仏の御勘氣を許され、一切衆生

きけんぶつ

な

たま

ほど

嬉

よろこ

喜見仏と成らせ給いしは、いくら程かうれしく悦ばしくお

わしけん。

ほけきよう

おん

もう

あ

さるにては、法華經の御ためと申すには、いかなること有

そむ

たも

ほとけ

のたま

りとも背かせ給うまじきぞかし。それに仏の言わく

だいおんじよう

ししゆ

つ

たれ

よ

「大音聲をもつて、あまねく四衆に告げたまわく『誰か能

しやばこくど

ひろ

みようほけきよう

と

とう

くこの娑婆国土において、広く妙法華經を説かん』と」等

うんぬん

われ

われ

おも

しよぶつ

おん

ほう

おも

云々。我も我もと思うに、諸仏の恩を報ぜんと思わん

あまごぜん

によにん

なにごと

しの

わ

めつご

しやばせかい

尼御前・女人たち何事をも忍んで我が滅後にこの娑婆世界

ほけきよう ひろ

さんかど

諫

たま

にして法華經を弘むべしと、三箇度までいさめさせ給いし

おんもち

たほう

こくど

ひろ

きよう

に、御用いなくして、「他方の国土において、広くこの經を

の

もう

たま

よ

よ

ふとくしん

あま

宣べん」と申させ給いしは、能く能く不得心の尼ぞかし。

幾

ほとけにく

思

ほとけ

側 向

いくばくか仏悪しとおぼしけん。されば、仏はそばむき

はちじゅうまんおくな

ゆ た

もろもろ

ごらん

て、八十万億那由他の諸の菩薩をこそ、つくづくと御覽

ぜしか。

によにん

よし

どう

な

お

いのち

す

されば、女人は由なき道には名を折り命を捨つれども、

じようぶつ

どう

弱

覺

そうろう

いま

まつだいあくせ

成仏の道はよわかりけるやとおぼえ候に、今、末代悪世

によにん

う

たま

物

覺

しま

の女人と生まれさせ給いて、かかるものおぼえぬ島の

えびすに、夷 罵のられ、う打たれ、せ責めをし忍のび、ほけきよう ひろ法華經を弘め

させ給う。たも か彼の比丘尼には雲泥勝れてありと、うんでいすぐ仏は靈山に

て御覽あるらん。ごらん か彼の比丘尼の御名を一切衆生喜見仏と申びくに みな いっさいしゆじようきけんぶつ もう

すは別のことにあらず、べつ いま みようほうあまごぜん な そうろう今の妙法尼御前の名にて候べし。

王となる人は、おう ひと か こ げんざい過去にても現在にても、じゆうぜん たも ひと十善を持つ人の

名なり。な な 変名はかわれども、し し ざ ひと師子の座は一つなり。この名も

かわるべからず。

彼の仏の御言をさががえす尼だにも一切衆生喜見仏と

なづけらる。名 ほとけ みこと 逆 返 あま 違これは仏の言をたがえず、ほとけ ことば 違この娑婆世界ま

で、名を失い、命をすつる尼なり。彼は養母として捨て給
わす、これは他人として捨てさせ給わば、偏頗の仏なり。
いかでか、さることは候べき。いわんや、「その中の衆生
は、ことごとくこれ吾が子なり」の経文のごとくならば、
今の尼は女子なり、彼の尼は養母なり。養母を捨てずして
女子を捨つる仏の御意やあるべき。この道理を深く御存知
あるべし。しげければ、とどめ候い畢わんぬ。

繁

止

そうら

お

にちれん

かおう

日蓮

花押

みようほうあまごぜん

妙法尼御前